

最終回

ふるさと見て歩き

国長の阿弥陀院

◇阿弥陀院の来歴

緒川地域の国長にある阿弥陀院は真言宗豊山派の寺で、正式には五仏山阿弥陀院西蓮寺といわれています。現在は奈良県の長谷寺の末寺ですが、もともとは下野国那須郡原（栃木県大田原市福原）の宝持山金剛寿院伝法寺の末寺でした。この金剛寿院は藤原良門（関白太政大臣藤原良房の弟）を始祖とする那須一族が祈願寺として建立したのです。

那須氏は真言宗の開祖空海に深く帰依していたため、福原に布教の拠点として金剛寿院が開かれました。那珂川流域での布教の展開が国長の地まで広まり、この地に阿弥陀院が建立されたと考えられます。金剛寿院の影響力がいかに大きかったかは、江戸時代前期、寛文三（一六六三）年の水戸藩の「開基帳」から推測できます。寺社の由緒、寺領、本末関係が記されているこの史料からは、旧八里地区（小舟、大岩、千田、小瀬沢、吉丸、油河内、入本郷、松ノ草）に金剛寿院の末寺が多数あったことが記されています。

阿弥陀院所蔵の古文書からは、宝徳二（一四五〇）年に祐善が中興（廃れていたのを再び盛んにした）したという内容の記述があるので、開山はそれ以前ということになります。また、阿弥陀院の歴代住職に名を連ねる宥庵は「常陸僧史略」という書物に名前が挙げられている高僧で、那珂郡北部では相当の格式を持っていた寺院といえそうです。



▲阿弥陀院

◇阿弥陀三尊像

阿弥陀院の本尊は鎌倉時代に作られた阿弥陀三尊像です。七百年ほど前の作ということになります。

県内でも数少ない中央（京都や奈良）の仏師の手になるこの三尊像は、柔和な中にも荘厳さを漂わせる素晴らしい像です。中央の阿弥陀如来坐像の高さは八十五センチメートル、脇侍の観音菩薩と勢至菩薩は九十三センチメートルあります。

阿弥陀院は天保期の寺社改革、幕末の騒乱をくぐり抜けてきました。明治三十五年の暴風により堂宇が破損したため、修復して現在の堂宇となりました。また、本尊も破損していたためこれを直し、昭和五十五年に入仏式を行ったことが参道に建つ石碑からわかります。

戦国期を中心に下野国（栃木県）那須郡内を勢力下に置いていた那須氏のゆかりの寺が国長にあるということは、この地域が歴史的に常陸と下野の国境として特殊な位置にあったことを改めて認識させるものです。市内には佐竹氏ゆかりの寺社や城跡が多くありますが、国境付近にはその間を縫うように佐竹氏以外の武家の痕跡をみることができます。阿弥陀三尊像は本堂内に安置されており、許可を得ればどなたでも拝観することができます。

〈参考文献〉『緒川村史』



▲本尊の阿弥陀三尊像

上大賀原坪のゼンコツチャマ

第41回（平成27年）の春の例祭

昨年9月号に掲載した「上大賀原坪のゼンコツチャマ」は講員と地区の住民により、信濃善光寺への初の団参が行われました。昭和三十年に講員五名が代参に行ったのが最初で最後になっていましたが、このたびおよそ三十名での団参が実現したそうです。それを記念してゼンコツチャマの祠を新調し、信濃善光寺より新たに御神体が勧請されました。今年三月十五日の春の例祭にそれを納め、数年ぶりに投げ餅が行われるなどして賑やかに祭が行われました。



歴史民俗資料館大宮館
☎52-1450